

# たより

## 文月の朝顔

西松布咏

文月は私の誕生月なので毎年幾つになっても恋する乙女に還った気分です。「文月や星逢う夜の…」と端唄を口遊み暑さを凌いでいた。しかし今年は、凛とした語りが素敵で長年来憧れの存在だった山根基世さんから二年越しで「声の力を学ぶ講座」の講師を依頼され「一途で多様な声と言葉」と題を決めたものの、どの様に展開して行ったら良いかこの事ばかりが頭を過ぎる日々だった。そして満を持して七月八日の夕刻、永祿年間に堺港からシルクロードを経て伝来した楽器が時を経てどの様なジャンルに分かれて現在に存続したかを三味線と唄で聞いていただいた。まさに「声と言葉」で私の三味線人生をも振り返るきっかけとなり、貴重な時間を山根さんからいただいた忘れられない文月となった。

私の三味線との出逢いは自分の殻に閉じ籠る内気な私を心配した祖母が近所の三味線の師匠に連れて行ったのがきっかけである。六歳の無垢な心にポツンポツンと響く糸と意味ありげな言葉が染み込んでゆくのに時間はかからなかった。

帰宅しランドセルを置くと同時にお道具の入った風呂敷包みを抱えてのお稽古。台風の吹き荒れる日にも隠れるようにして通う姿をあきれて見送ったと母は時折言っていた。その頃から段々親の言うことを聞かない娘になって行ったと。

最初は長唄、三味線、踊りの稽古だったが、だんだん唄に興味を持つようになり小唄、端唄、新内、そして声の使い方も節廻しも難解な豊後系浄瑠璃である富本を日がな一日鏡の前でもがき苦しんでいる姿を見かねて「女の声では無理だからやめて欲しい」と懇願されたり、道ならぬ恋に走った時「実りのない生き方をしないで!」とさめざめと泣かれたこともあった。



大切な母を悲しませないためにはどう生きたら良いか…その葛藤があったからこそ私は益々唄の道にのめり込んだのかもしれない。

やがてお勤めも辞め芸の道を極めて行こうと覚悟し自宅に稽古場を設けた。少しずつ弟子が増え初めて「美紗の会のつどい」の名称で演奏会を開催す運びとなった。すると母は松花堂弁当箱を二十個買い「宴席は私が受け持つから」と勝手に決め徹夜までして仕上げた見事な弁当を演奏を終えた弟子達が美味しそうに食べる姿に満面の笑みを浮かべていた。

私は有難かったが頼みもしないのにわが身を削ってまで行動する母の凄まじい実行力を疎ましく思ったこともあった。

母は一途な生き方しかできない娘を不憫に思ったのか、根負けしたのか様々な出会いの中で拡がってゆく芸一筋の私の影になり日向になり応援してくれる様になり、まさに二人三脚の幸せな年月が過ぎていった。

しかし十数年前に道端で転び大腿骨骨折してから他人の世話が何よりの幸せだった母が自分のことも出来なくなっていく。長い間私の杖になってくれたのだから今度は私が杖にならなくては…と母の介護に懸命になると自分の時間が削られ体力気力が日毎に萎えて行く現実との葛藤が続いた。やがて自宅で面倒を見ることが不可能になり近くの「白金の森」ホームに入ることになり稽古の合間に面会に通うことになる。

穏やかに笑顔で迎えてくれる日もあれば足の痛みをこらえ寝込む日もあり、会う時はいつもはらはらドキドキ。夢と現の間を三味線と唄で過ごして来た人生とはまるで違う刺激的な母との時間は声も言葉も音楽も介在しない不思議な安らぎの世界だった。

しかしコロナ禍で年末から正月まで会えずようや



く松の内を過ぎてリモートで対面した時は今迄見たことも無い衰弱した母となってしまっていた。医師からいつどうなるか判らない老衰の状態なので覚悟して見守る様に告げられその日は思い切り泣いた。すでに食欲はなく水分すら喉に通らず眠り人形の様に透明な穏やかな顔になって行く母に複雑な想いを持ちながら日々は過ぎて行く。

コロナ禍で延期した七月十一日「第六十一回美紗の会のつどい」を祈る様な気持ちで終え、七月二十三日の私の誕生日も過ぎると日毎に衰弱してゆき二十七日は妹と共に母の手足をいつまでもさすり続けた。そして、暁の紺朝顔や星一つ 万太郎 の句の様に母は二十八日の明け方九十五歳で天国に星となって召されて行った。朝顔の花言葉は、儂い恋、

愛情、固い絆。その花弁は夜明け前から花開くとある。母は私のために必死で文月を生き抜き、夜明けに星となつて最愛の父のもとに旅立ったと思いたい。

朝顔はつるべが無いと花開かない。私にとつての母。母にとつての私はお互いにつるべに纏わりつく朝顔だったのかもしれない。つるべを失った朝顔をこれからどう咲かせて行くか。来年の文月にも美しい朝顔が開くよう精進を重ねてゆきたいと思う。

## 初めまして

高橋輝一郎

こんにちは。高橋輝一郎と申します。此の度（とは言つてももうだいぶ経ちましたが）、西松先生の元で唄と三味線を習うことになりました。簡単に自己紹介を致しますと一九九九年生まれの二十一歳（執筆当時）で大学生です。趣味は音楽全般（鑑賞・作曲・演奏）、散歩、読書、テレビやYouTubeの鑑賞といったところです。どんな音楽が好きなのかと聞かれるれも育ちも日本なのでもちろん「和風」の音や音と、本場に「何でも好き」なのでいつも困ってしまいます。

あとどうでもいいですが仮面ライダーが好きで基本あまり喋らないタイプですが話かけてくれさえすれば結構喋ります。年が近い人はなかなか居らっしゃらないかもしれないですが、そんな事お構い無しに話しかけてくれると嬉しいです。基本東京以外に住んだことがないですが七ヶ月だけ留学でスウェーデンに住んだことがあります。宜しくお願いします。

入会のきっかけになったのは西松先生のお友達の上田さんでした。僕が音楽に興味にしていることを話すと、「それならば」ということで四谷の紀尾井ホールで行われた西松先生も出演する舞台に招待して頂



きました。そこで初めて、先生の演奏を聴かせてもらいました。「衝撃を受けた」などと書くの大袈裟になつてしまいましたが、何もかもが新鮮でした。生まれも育ちも日本なのでもちろん「和風」の音や音階というものに聞き馴染みはありますが、面白かったのは唄と三味線の絡みでした。リズムがなくなつていたり、音がぶつかつていたりするような箇所がたくさんありました。でもそれは、僕の耳が「西洋音楽の耳」、言い換えれば「無意識のうちにリズムとコードを探してしまう耳」であるからに他なりませんでした。

この「唄と三味線だけという究極のシンプルさ」と「独特な間（ま）が生み出す究極の複雑さ」を併せ持つという両義性が非常に日本的であり、芸術的であり、魅力的なのだろうと思えます。と、話が逸れ過ぎていますがそんなこんなで、コンサートの後は先生とお話させてもらい、「よかったらやってみ

ない？」とお誘い頂きました。

すでに魅力を感じていたものの、その頃の僕に入会する意志はまだありませんでした。そして神田明神で行われた記念の美紗の会に招待して頂いたり、上田さんやウチの家族も一緒にご飯を食べに行ったりしているうちに、「やってみてもいいかも」という気持ちになってきました。それは、誤解を恐れずに言えば、西松布咏さんという人間にも魅力を感じていたからかもしれません。とても重い看板や伝統を背負っているはずなのに軽やかでしなやかなところには驚かされたし、とても尊敬できました。

人に何かものを習うということになったときに、これは僕の中でかなり大切なことです。見た目や肩書きの壁があつて変に遠慮したり無駄に心配りしたり、気兼ねなく話せなかったりするとコミュニケーションが取りづらくなってしまふからです。正直、先生がそのような方だったらただけ唄と三味線が素晴らしくても入会はしていません。

今年の四月に入会を決め、五月から稽古がスタートしました。思っていた通り、唄に関してはまず独特の節回しと裏声をたくさん使うところに慣れるところからのスタートですが、先日の美紗の会ではなんと初舞台を踏ませて頂くことができました。

次は三味線でも出演できるように練習に励みたいと思っております。

## きつかけ

前川 充

西松布咏先生、そして美紗の会と知り合うきっかけとなったのは、二〇一三年に真紀子と結婚したことです。

真紀子とは、勤務先であるシスコシステムズという米国に本社を置くネットワーク機器メーカーのプロジェクトで知り合った。ある懇親会で、会場の店にたまたま早く着いてしまい、音楽やアート、建築、旅行などで話がはずみ、その後何度か食事したり映画を見たりして互いのことを理解し、ほぼ一ヶ月で結婚の約束に至った。

私は京都市の先斗町近くで生まれ育ったので、何人かの同級生は芸事を習っていたし、親がプロの家もあった。また、私が所属する「夢二研究会（大正時代に活躍した竹久夢二を正しく理解し顕彰する研究会）」において、夢二を始め当時の文化人は、日常生活の中で三味線に慣れ親しんでいたという会員発表もあり、三味線音楽に興味を持つきっかけとなっていた。

それにしても、真紀子がイメージとはかけ離れている三味線と小唄を習っていることは本当に意外だった。江戸時代から続く大衆文化の味わいなど全く知らなかった私だが、「美紗の会を聴きに来て」と真紀子に誘われ、その味わいを少しずつ理解できるようになってきたように思う。時折、私にお稽古しないのと尋ねられることがあるが、真紀子とはテニスでは互角だが、真紀子に負けることはやりたくないの、今のところきつかけはまだない。

美紗の会で写真と映像を撮影されていた百瀬氏のピンチヒッターを依頼されたことがきっかけで、「美紗の会をつどい」他の撮影をさせていただくようになった。それ以来先生とお弟子さん皆さんの演奏と曲に一層集中して向き合うよう努めている。

ところで、私は主たるITの仕事やアーティスト、音楽家、小規模な団体やNPOなどをデジタル技術でお手伝いしてきている。私が目指すのは、個人や



グループで様々な表現・創作している人々の作品や活動を、手軽に安価に記録保存し、遠くの人々や後世の人々に伝わり、二次創作の素材になるような仕組みづくりをすることである。

たまたま、そのようなお話を西松先生にした際に、先生が、自らの録音、録画したものを、きちんと整理・保存し、後世に伝えたいとの意向をお聞きし、ボランティアで少しずつデジタル・アーカイブさせていただいている。コロナが収まることを期待して、

二〇二二年頃には、そのアーカイブの一部を美紗の会の皆さんに限定公開できるよう、このアーカイブによって様々なきっかけが生まれることを夢見ながら：鋭意努力中である。

現在、真紀子と私が勤務する会社の規定により、コロナ感染予防のため三人以上の場での会食や酒席への参加が禁じられている。すでに二度、美紗の会の懇親会に欠席して心苦しい限りであるが、次回こそ、皆さんと談笑できるよう切に願うばかりである。

「美紗の会のつどい」に感心感激感謝

太田 剛

令和三年七月十七日に開催された第六十一回「美紗の会のつどい」にお招きいただきました。新型コロナウイルス禍は第五波を迎え、感染者数が右肩上がりとなる中、東京都には四回目の緊急事態宣言が出されながら、東京五輪の開会式まで一週間を切り、賛否両論騒がしい日々の中でした。

梅雨が明けの猛暑日で、都営浅草線三田駅から炎天下をトボトボと、会場の港区立伝統文化交流館へ向かいながら、「美紗の会のつどい」の開催を決断された西松布詠師匠の心意気というか、胆っ魂に思いを馳せ、ワクワクがとまりませんでした。

布詠師匠とのご縁は、もう二十年以上前になりました。松岡正剛氏が主宰する編集工学研究所にいた時に、内輪の誕生会に師匠をお招きし、神楽坂のお座敷で地唄「黒髪」を聞いたのが最初でした。その時の衝撃、全身にたった鳥肌は今でもアリアリと思ひ出されます。

それから何度かイベントにご出演いただき、布詠師匠の唄と三味線をA-1にインプットして、それを



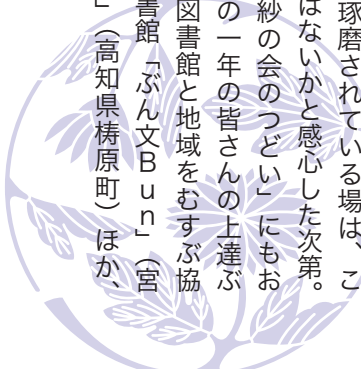
リアルタイムで映像に変換して会場の大モニターに投影する試みなど、様々なお願いにも、いつも快く応じていただきました。また、三年前まで住んでいた白金台では、ご近所さんでもあり、居酒屋やバーなどで、時々顔を合わせることもあり、そんなご縁で「美紗の会のつどい」にお招きいただきました。

会場の港区立伝統文化交流館は、元は芝浦花柳界の見番だったもので、昭和十一年の建築。戦後は港湾労働者の宿泊所として都が使用していたそうで、都内に現存する唯一の木造見番建造物という。まさ

に猛暑の中で、都会のオアシスのような空間で、日頃、布詠師匠の厳しいお稽古で磨かれた個性豊かなお弟子さんたちが、入れ替わり立ち替わり、司会の軽妙洒落な案内で、次々と小唄や端唄、新内を披露していきます。布詠師匠とのご縁が広がる前から、仕事でもプライベートでも懇意にさせていたでいる川崎隆章氏も美声を披露し、その堂々たる唄いっぷりに思わず拍手拍手。典咏さんことかたせ梨乃さんも唄に糸にと華を添えていて、八十歳過ぎの超ベテランから、今年の五月に始めたばかりの若者まで、日頃の稽古の成果を存分に発揮していて、しっかりと三味線の音色と、それぞれの言葉に折り畳まれた粋な風情や、女の情念など、めくるめく日本文化のヒダヒダに潜む機微を堪能しました。

時節柄、オンラインで参加されるお弟子さんもいて、いよいよ和事の世界にもITが取り入れられてきたかと、慶應義塾大学SFCでネットワークコミュニケーションを教える身としては、なんとも感慨深いものがありました。とはいえ、やれインターネットだ、やれDX(デジタルトランスフォーメーション)だといわれる昨今ですが、こういう三味線の、ざわり、のようなデジタル化し難い技芸や、浄瑠璃やお能、歌舞伎なども重なり、何重にも折り畳まれたアーカイブを背負った言葉の世界こそが、これからの日本の未来を支えるのではと思うわけです。

さらに、この「美紗の会のつどい」のように、まさに老若男女と一緒に切磋琢磨されている場合は、これこそ生涯学習のお手本ではないかと感心した次第。昨年の神田明神での「美紗の会のつどい」にもお招きいただきましたが、この一年の皆さんの上達ぶりには驚きました。普段「図書館と地域をむすぶ協議会」を率いて、椎葉村図書館「ぶん文Bun」(宮崎県)や「雲の上の図書館」(高知県梶原町)ほか、



全国で図書館づくりをしている身としては、ここに多くのヒントがある気がしました。

図書館は行政的には教育委員会の管轄となり、教育委員会は学校教育と生涯学習に分けられ、図書館は生涯学習の拠点とされます。今、地方創生が叫ばれる中で、生涯学習の重要性が指摘され、一生涯学び続ける姿勢を身につける学校教育の在り方が問われてきています。音楽の時間に邦楽をといった単純な話ではなく、世代間交流による技法と言葉の継承の場と、生涯学習や学校教育の在り方はつながる話だと得心しました。

「美紗の会のつどい」の後の懇親会は、ノンアルコールで静かに爽やかに細やかに開かれました。

川崎兄の名司会により、同じテーブルの服部真湖さんや、銀座の文壇バー「サボン」のママの水口素子さん、お隣のテーブルには元NHKエグゼクティブアナウンサーの山根基世さん他、個性豊かなお弟子さんたちのスピーチに聞き惚れました（私も一言二言、お話をさせていただきましたが）。本当に素晴らしい会にお招きいただき、ありがとうございます！このご時世にこのような会を開催するご苦労は並大抵ではなかったかと。西松布詠師匠はじめスタッフの皆さんに心から感謝いたします。

## ●今後の予定

### 第62回 美紗の会のつどい演奏会

11月28日(日)12時より

場所 港区立伝統文化交流館



第61回 美紗の会のつどい